

短期海外研修の教育的意義について

黒崎 真由美^a

^a 湘北短期大学総合ビジネス学科

【抄録】

本学は、開学以来一貫して「国際理解教育」に重点を置き、今日に至るまで様々な取り組みを行ってきた。本稿では、過去に実施した短期海外研修を振り返り、その教育効果と研修に参加した学生のカルチャーショックの相関関係について考察したものである。

【キーワード】

短期海外研修 国際理解教育 カルチャーショック モティベーション教育

はじめに

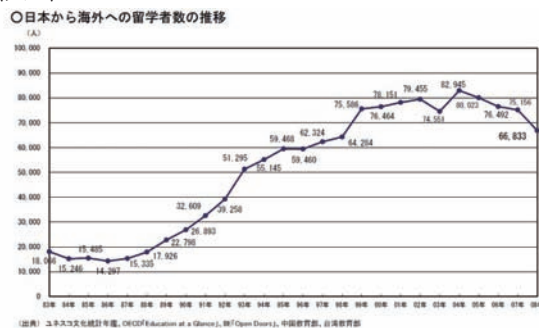
本学では、「英語に頻繁に触れさせる」ことを通じて、英語コミュニケーション力を育成する様々な取り組みを行ってきた。姉妹校協定を結ぶオーストラリアの大学とは、教員の受け入れ、本学学生の3ヶ月留学、短期海外研修による派遣、オーストラリア学生の受け入れという双方向交流を長年継続している。

文部科学省による「日本人の海外留学者数」の調査によると2009年度統計〈表1〉では、海外の大学等に留学した日本人は各国・地域で59,923人、対前年比約10%の減少となっている。最大であった2004年(82,945人)に比較すると、約28%の減少となっている。特に米国の大学等に在籍する日本人学生数は、統計のある1998年の46,406人から2009年の24,842人へと、54%と、著しく減少して

<連絡先>

黒崎 真由美 mayumi@shohoku.ac.jp

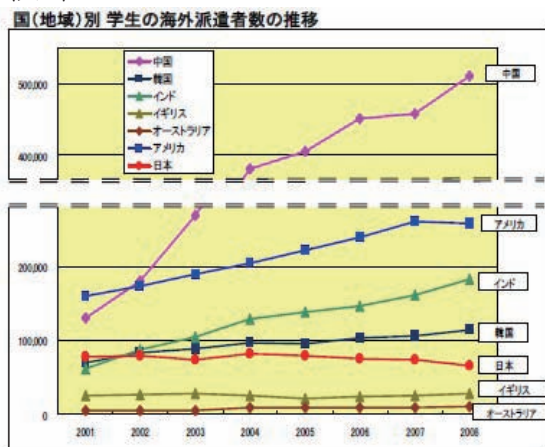
〈表1〉



いる。大学生についても、就職活動の早期化等による不安から留学を敬遠する等の所謂「内向き」の傾向が強まっている。就職後に、海外で働きたいという者の数が以前と比較して減少しており、グローバル化の動きとは逆行した現象が見られる。このことが言語的な問題だけにその理由を見つけるのは早急であるが、国際化教育面での立ち遅れが原因していることが考えられる。

また、国(地域)別学生の海外派遣者数の推移〈表2〉を見ると、日本は漸減しているのに対し、経済振興著しい中国は、大幅な伸びを示している。

〈表2〉



一方では、文部科学省が「『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想の策定について」を2002年にとりまとめ、その中で、教育機関における達成目標を以下のように掲げている。

○中学校卒業段階：挨拶や応対等の平易な会話（同程度の読む・書く・聞く）ができる（卒業者の平均が英検3級程度）。

○高等学校卒業段階：日常の話題に関する通常の会話（同程度の読む・書く・聞く）ができる（高校卒業者の平均が英検準2級～2級程度）。

○国際社会に活躍する人材等に求められる英語力：各大学が、仕事で英語が使える人材を育成する観点から、達成目標を設定。また、学習者のモチベーション（動機付け）の高揚として、英語を使える機会の充実を挙げ、「外国人とのふれあい推進事業」：学校を中心とした英会話サロン、スピーチコンテスト及び留学生との交流活動等の事業を推進。大学生等の海外留学を希望する学生のための海外派遣奨学金の充実。

大学教育においてもグローバル化の必要性が叫ばれ、国際的な競争と協同に関して取り組んでいかなければならない状況下、短期大学の国際化は、大学の機能を高めつつ、有為な人材を社会に輩出するうえで、大きな責任を持っている。本稿で

は、1989年以降継続的に実施してきた、「短期海外研修」を振り返り、どのような教育効果を齎したかということ。また短期海外研修とカルチャーショック（culture shock）との相関を、参加学生のレポート等を通じて考察するものである。

1. 短期海外研修の実施の経緯

本学では、20年以上に亘り、学生の夏季ないしは春季休暇を利用して、約2～3週間の短期海外研修を実施してきた。1980年には、当時の英語教員の発案で、ハワイ研修を行っている。当時の海外研修の内容は観光を中心としたもので、英語の学習を基本に単位を認定する現在のものとは異なっていた。

今までに実施した研修先は、姉妹校であるアメリカ・コネチカット州立大学（Connecticut University）、オーストラリア・国立ニューカッスル大学（The University of Newcastle）（以下UNという）、カナダ・ビクトリア州立大学（University of Victoria）。加えて、ニュージーランド・オークランド大学（Oakland University）、オークランドランゲージセンター（Oakland Language Centre）、インターナショナルアカデミー（International Academy）である。

コネチカット州立大学とは、本学が位置する厚木市の仲介で1990年に教育交流協定を結んだ。米国の大学が夏休みになる6月に本学へ学生を受け入れ、8月には本学の学生を派遣する双方向プログラムであった。派遣学生は、ソニー(株)からの留学奨学金制度が適用され、事前指導の後15名に引率教員がついて、2週間のプログラムを行った。滞在先は、キャンパス内にある寮であった。治安の問題、また当時はコネチカット大学がホストファミリーを確保できないという理由で、ホームステイは叶わず、交流の面で不足があった。

その後は、治安の面やホームステイが可能な場所という観点で、留学斡旋会社を通じて、オセアニアの国である、ニュージーランドとオーストラリアへと研修先を変更した。両国とも親日家が多いことや日本と季節が逆であり快適な気候であること。2月から3月は、学年末試験が終了し、社会に出る前の束の間の休暇となる。研修参加者は、卒業を目前にした2年生が大半を占めており、卒業旅行としての意味合いが大きかった。

ニュージーランドの研修先は、日本語ができるスタッフがいることと、ホームステイが可能であること。多彩なアクティビティーが実施できるということ等を基準に決定した。特に、オークランド大学で実施した2000年、2001年当時は、まだキャンパス内外に外国人のためのランゲージセンターがなかったが、オークランドの中心に位置する広大なキャンパスを活用した学習は、参加学生に非常に好評であった。しかしながら、もう一つの目的である現地大学生との双方向交流（エクスチェンジプログラム）を行うための基盤を確立することができず、2年間だけの研修先で終了せざるを得なかった。

2002年からは、学生のエクスチェンジプログラム、教員招聘や3ヶ月留学等の交流を活発に行っているUNに研修先を固定し、夏季の短期海外研修とした。理由は、治安が良いこと。オーストラリアのニューカッスルという街に位置する広大なキャンパス内で研修ができること。良質なホームステイ先を確保できること。比較的日本人が少なく、異文化を肌で感じ取ることができること。大学当局が本学との交流の意義を理解し、UNに在籍する学生との交流プログラムが可能であること等が挙げられる。また、就職活動時期の変化や雇用環境の悪化という国内事情によるところも多かった。以前は就職の内定を早期に獲得し、アルバイト等で参加費用を捻出するということが可能

であった。2月～3月にかけては、1年生の就職指導に係る学内のイベントの増加等で実施が困難になったということも起因している。学生にとっては、2週間～3週間もの間海外に滞在することは、特別の理由がなければ社会に出てからは可能なはずもなく、この機会を学生時代の最後のイベントとして参加していた。

2004年からは、相互点検・評価⁽¹⁾の相手大学である、松本大学松商短期大学部へも参加の呼びかけを行い、共同催行とした。このメリットは、①海外で他大学間交流ができる。②共同催行することによって、参加人数の増加につながり、研修費用を安価に抑えることができる。③双方の大学から引率者がつくことによって、学生ケアの充実が期待できるという点にある。特に、①の他大学交流については、双方の学生がそれぞれの大学の代表である、という自覚を持った真摯な活動につながっている。松本大学松商短期大学部においても周到な事前指導を実施し、学長も参加する結団式においては、両大学の学生が顔合わせを行い、共同で行うプログラム等の確認を行い、交流を深めている。

大学が主催する「短期海外研修」として、湾岸戦争の影響で中止した1992年を除いて、過去に780名の学生を派遣している。

以下〈表3〉が、これまでに実施した短期海外研修の状況である。

〈表3〉 短期海外研修実施状況

年度	国名	留学(研修)先	参加学生 (本学)	参加学生 (松商)	参加学生 合計	実施 時期	備考
1980	アメリカ	ハワイ	不明			8月	
1989	ニュージーランド	Oakland Language Centre	54		54	2月	
1990	ニュージーランド	Oakland Language Centre	29		29	2月	
1991	アメリカ ニュージーランド	Connecticut University Oakland Language Centre	20 78		2078	8月 2月	ソニー奨学金 夏季・春季2回実施
1992	ニュージーランド アメリカ オーストラリア	Oakland Language Centre Connecticut University The University of Newcastle	53予定 9 17		53予定 9 17	2月 8月 2月	湾岸戦争で中止 ソニー奨学金
1993	ニュージーランド アメリカ カナダ オーストラリア	Oakland Language Centre Connecticut University University of Victoria The University of Newcastle	78 6 8 22		78 6 8 22	2月 8月 8月 8月	夏季・春季4回実施
1994	ニュージーランド オーストラリア	Oakland Language Centre The University of Newcastle	19 7		19 7	2月 2月	春季2回実施
1995	ニュージーランド オーストラリア	Oakland Language Centre The University of Newcastle	18 7		18 7	2月 8月	夏季・春季2回実施
1996	ニュージーランド	International Academy	17		17	2月	春季
1997	オーストラリア ニュージーランド	The University of Newcastle International Academy	12 17		12 17	2月 2月	春季 春季
1998	オーストラリア	The University of Newcastle	9		9	8月	
1999	オーストラリア	The University of Newcastle	14		14	8月	
2000	ニュージーランド	Oakland University	32		32	8月	
2001	ニュージーランド	Oakland University	24		24	8月	
2002	オーストラリア	The University of Newcastle	18		18	8月	
2003	オーストラリア	The University of Newcastle	14		14	8月	
2004	オーストラリア	The University of Newcastle	26	5	31	8月	松本大学と合同催行
2005	オーストラリア	The University of Newcastle	24	2	26	8月	
2006	オーストラリア	The University of Newcastle	12	1	13	8月	
2007	オーストラリア	The University of Newcastle	26	5	31	8月	
2008	オーストラリア	The University of Newcastle	24	7	31	8月	
2009	オーストラリア	The University of Newcastle	31	6	37	8月	
2010	オーストラリア	The University of Newcastle	28	6	34	8月	
2011	オーストラリア	The University of Newcastle	27	4	31	8月	ソニー国際理解奨学金
合計			780	36			

短期海外研修の告知と申し込み

短期海外研修は、全学科の学生を対象としている。なるべく多くの学生に参加してもらいたいという趣旨で、パンフレットの作成や現地受け入れ機関との交渉は、旅行会社等を介さずに直接行っ

ている。プログラムの内容も過去の経験を踏まえて、最善のものになるよう毎年改良を加えている。

入学直後の保護者会や学科のオリエンテーションガイダンス時に、短期海外研修の告知を行う。また、情報メディア学科、総合ビジネス学科、生

活プロデュース学科の必修英語科目である「ジェネラル・イングリッシュ」や保育学科の必修英語科目である「英語」において、専任教員のみならず非常勤講師にも依頼をして、研修の内容説明・参加することの意義を学生に伝えてもらっている。近年は2年生に進級した参加学生からの口コミ効果が大きく、1年生の参加者が増加している。

告知した後は、学生の参加しやすい曜日・時間を設定し、参加説明会を複数回行っている。過去に実施したプログラムの内容について、写真を多く活用し研修の意義を伝えている。参加者は、例年全学科（情報メディア、総合ビジネス、生活プロデュース、保育）から出ており、この研修は他学科間学生交流の意味合いも含んでいる。また、前期に招聘しているUNの教員も説明会に出席し、海外で勉強すること、ホームステイをすること、授業の内容について説明・指導を行い、学生の質問に答えている。

研修事前指導

事前指導は、単位認定の正規の科目の一環という位置づけをもって、必ず出席するように指導している。

研修担当は、英語教員と海外研修の引率経験のあるグローバルコミュニケーションセンター⁽²⁾所属の職員、そしてUNからの招聘教員が共同で行う。短期とはいえ、研修が実を結ぶかどうかはこの事前指導の内容如何に懸かっているといっても過言ではなく、学生の事前指導には時間をかけた丁寧なものにしている。指導は、原則的に学生の昼休みを利用している。

滞在方法が全期間ホームステイであることから、その意義やホテルステイとの違い等、留意すべき事項についての指導を徹底している。研修出発前には、学長出席のもと「結団式」を実施しているが、これには研修に参加する松本大学松商短期大学の学生と引率者も来学し、事前の顔合わせと交流が行われている。

以下〈表4〉は、2011年に行った事前学習の内容である。

〈表 4〉

回	月日	時間	内容
第1回	6月9日(木)	12:40～13:10	・事前学習スケジュール確認 ・健康チェックシート配布 ・パスポート申請について
第2回	6月23日(木)	12:40～13:10	・外貨・海外旅行保険・レンタル品について ・研修資料配布(勉強会用)
第3回	6月30日(木)	12:40～13:10	・海外に行く心得(生活・外貨) ・ホームステイについて
第4回	7月6日(水)	16:40～18:10	・基礎英会話(自己紹介・あいさつなど) ・留学先ニューカッスル大学について ・ホームステイについて
第5回	7月7日(木)	12:40～13:10	・海外に行く心得(健康・安全) ・カルチャーショックについて
第6回	7月14日(木)	12:40～13:10	・リーダー決め、イベント決め、役割決め
第7回	7月21日(木)	12:40～13:10	・英会話(日常(生活)会話)
第8回	7月23日(土)	13:00～14:00	・松本大学松商短期大学部参加者との顔合せ
第9回	7月23日(土)	14:00～14:30	・結団式 ・事務連絡

研修内容とホームステイ

基本的には、午前中の英語研修、午後にはエクスカージョン (excursion) がプログラムに組まれている。(表5)

参加者は、オーストラリア人の家庭でホームステイをしながら、活きた英語の学習を行う。

英語研修は、2週間という短期で行われるため、本学と松本大学松商短期大学部の学生だけのクラスになるが、「楽しく英語を学ぶ」ということを一番の目的に、買い物、オーストラリアの地理、文化など身近な題材をもとに、18名1クラスを基本に構成されている。担当教員は、TESOL (Teaching English to Speakers of Other Languages) ⁽³⁾ の有資格者で、英語を母国語としない学生への指導方法に精通している。研修プログラムは、24時間の英語学習と25時間の課外研修がセットになっている。エクスカージョンは、ニューカッスル市長への表敬訪問、博物館見学、現地の小学校や老人ホームへの訪問、風光明媚な湾でのドルフィンウォッチング、コアラのいる動物園の見学等、オーストラリアならではのアクティビティーが用意されている。また、前年にエクスチェンジプログラム ⁽⁴⁾ で来学したUN学生との交流が組まれており、学生同士が旧交を温めることができるのも大きな特色の一つである。

ホームステイは、24時間の英語学習を意味することから、参加学生は英語という言語を使ってホストファミリーとコミュニケーションをとろうと努める。基本的には、ファミリーがお弁当を作って持たせ、大学まで送迎してくれるシステムをとっている。ホストファミリーは、過去に本学の学生を受け入れたことがある家庭が大半を占めている。事前教育における、「ホームステイの意義に関する教育」が浸透している影響であろうか、本学の学生に対するホストファミリーの評価は高い。

「たとえ英語が苦手でも、臆せず話しかける」、「積極的に思いを伝える」ということがオーラル・コミュニケーションには非常に重要である。長年実施している、イングリッシュラウンジ ⁽⁵⁾ などで、知らず知らずのうちに身に付けているということがわかる。評価を得ているということは、今まで以上に事前教育の充実に努めなければならないことを意味している。

我が国における従来の外国語教育は、英文学に代表されるように、知識の修得を目的に読解の能力に力点が置かれてきた。その後、オーラル・メソッドという教授法が紹介され、語学学習は反復・習慣の形成であると捉え、日本語を極力使わない方法が取り入れられた。UNで行われる英



〈ニューカッスル市長表敬訪問〉



〈授業の様子〉

短期海外研修の教育的意義について

語プログラムは、コミュニケーション・アプローチ (Communicative Approach) という教授法が取られている。より実際の場面に即したコミュニケーション力を伸ばすことに重点が置かれた、学習者中心の教授法である。学生は、買い物、旅行、空港等、それぞれのステージで自らの考えや意見を英語で発言しなければならない。24時間程の英語授業に加え、ホームステイにおける24時間英語漬けの環境は、それがたとえ短期間であったとしても、自分の考えを人に伝えることの重要性を学ぶには十分な時間である。1989年に改正された学習指導要領において、「コミュニケーション能力の育成」と「国際理解の基礎を培う」ことが、中学校や高等学校における英語教育の大きな柱として提示された。その学習を経て入学してきた学生にさえ、この教授法は非常に新鮮であり、帰国後に英語学習に意欲を持って取り組むようになったという例を数多く見るができる。

この研修のハイライトはホームステイであり、その意義についても事前の学習で念入りに行っているが、近年の核家族化の進行や情報テクノロジーの発達は、対人コミュニケーションにおいて、『内にこもりたがる』学生を作りかねない。①全てがセットされているバック旅行とは異なるのだということ、②ホテルステイのように、サービスを要求するものではないこと、③一般の家庭で過ごすことによって、文化や生活習慣、ものの考え方等を実際に感じ取り、文化や習慣が異なる人々と交流する場合には、何に気をつけて何を大切にしなければならないのかということ、④日常会話やさまざまな交流を通じて、コミュニケーションの重要性とその方法を学ぶ機会であるということ等を、グループワークを交えて指導する。また、⑤オーストラリアは、歴史の新しい他民族国家であり、様々な人種によって国が構成されているということも指導上の重要なポイントとしている。

〈表 5〉 短期海外研修スケジュール

THE UNIVERSITY OF NEWCASTLE LANGUAGE CENTRE
2 week STUDAY TOUR PROGRAM
14 August to 25 August 2011
For SHOHOKU COLLEGE

SATURDAY	SUNDAY	MONDAY	TUESDAY	WEDNESDAY	THURSDAY	FRIDAY
	14 / 8 Arrival 07:00 QF22 Sydney Transfer to Newcastle Met by staff & host families	15 / 8 9-12 English lesson 1-4 Visit to Newcastle City and Christ Church Cathedral	16 / 8 9-12 English lesson 1-4 School visit	17 / 8 9-12 English lesson 1-4 Free time	18 / 8 FULL DAY EXCURSION 9-4 Visit to Port Stephens- Dolphin Watch- Sand Dune 4WD	19 / 8 9-12 English lesson pm Free Time 6.30-9.30 Buttai Barn Bush Dance
20 / 8 Free with host family	21 / 8 Free with host family	22 / 8 9-12 English lesson 1-4 Sport on campus: Basketball, volleyball, badminton or swimming	23 / 8 9-12 English lesson 1-4 Visit to Oakdale Farm	4 / 8 9-12 English lesson 1-4 Free time	25 / 8 9-12 English lesson 1-4 Free time 3-4 Graduation afternoon tea 4.30 Departure from Sydney	

単位認定と学生のレポート

短期海外研修は、4学科とも単位認定の正規の科目として位置づけられている。単位認定の条件は、UNの修了証書取得、引率者からの学生各自の行動に関するレポート、英文でのレポート(250 words)と和文での研修に関する感想文の提出である。科目名は学科ごとに異なり、情報メディア学科では「英会話(2単位)」、総合ビジネス学科と生活プロデュース学科では、「海外英語研修(2単位)」となっており、保育学科については、他学科履修という形で対応している。

参加した学生のレポートの一部を紹介する。(原文のまま引用)

●日本人は“もの言わぬ精神”を持っていて、言わなくてもわかることが当たり前になっています。しかしオーストラリアでは違いました。・・・短期海外研修では、理解しよう、伝えようとする気持ちが大切なことと、言葉や行動にして伝えることがとても大切であることだと改めて感じました。

●私がこの短期研修で得たものは伝えることの大切さと英語への親近感である。私にとって英語は今まで「テストの点を取る」だとか「英検を取る」と言っただけのもので実践的な会話やコミュニケーションのためのものではなかった。・・・英語はもちろん勉強は必要だけど辛く苦しいものではなくて海外のどんな人とも楽しむためのものということだ。

●オーストラリアで2週間過ごしたことで自分のいろんなものが大きく変わりました。気持的にすごくポジティブになり、私は人見知りであり人に関わることを好みませんでした。この短期研修でもっといろんな人と関わりたいと思いました。外国にもすごく興味がわき、生きているうちに多くの国に行きたいと思います。

●帰国して何日かたった頃、アルバイト先に

外国のお客様が来店しました。・・・英語をまじえて注文を承っていたところ、「Can you speak English?」と話しかけられました。・・・「Yes, I can speak English a little.」と答えたところ・・・お褒めの言葉をいただきました。私はただ純粋に嬉しかったのと、2週間の短期研修が無駄ではなかったと思い、自分の英語にもっと自信を持っていこうと思いました。

●そして、その日(Buttai Barn)の帰りにとても星が綺麗だと気がきました。

●様々な経験をした2週間だった。こんなことを言ったら大袈裟だと思われるかもしれないが、私は短い人生を一度終わったような気持ちだ。このような体験をさせてくれた・・・に本当に感謝している。

●私は今回オーストラリアに行って本当によかったと思う。最初は行くかどうか悩んでいたが、オーストラリアに行ったことでたくさんのことが学べ、自分を成長させることができた。異文化に触れることで、自分の視野が広くなり新しい物の考え方が身に着き、外国から見た日本の魅力も知ることができた。文化だけでなくたくさんの人とも触れ合い、湘北生、松商短大の学生、ニューカッスル大学の学生とも仲良くなれた。また、外国ならではの景観も楽しめた。

●今回のこの研修では、普通であれば経験できないようなことばかりを経験することができました。今まで他人であった人と家族のような関係になり、同じ時を過ごすということはとても素敵だと思います。多くの人に自慢したくなるような研修でした。

●私はオーストラリアを訪れたのは今回が2回目でした。しかし、今回のオーストラリア短期海外研修では、以前に訪れたときにはできなかった沢山の経験をすることができました。・・・そしてその中でもやはり1番に心に残っていること

は、英語しか使わない環境の中で、現地の人達と2週間生活を共にしたことです。

今までは安穏とした日々を過ごしてきたかもしれない学生は、異文化に身を置く経験を持ったことで、母国である日本や環境問題、自然、そして自分自身の内面を振り返る「気づき」を得ているのである。またこのことを契機に、「気づく」ことの重要性に「気づく」のである。この価値は大きい。到着直後に感じた違和感は、ホストファミリーに対する信頼感へとつながっている。2週間の異文化経験が心を揺さぶるかけがいのない経験になっているのである。

事前指導の一環として実施している本学独自のものは、手紙（文章）を書くことの重要性を指導することである。参加した学生達は、オーストラリアから親しい人々に手紙や葉書を直筆で書いて送る。今の学生は、生まれた時から、もしくは物心ついた頃から、デジタル技術やそれに伴う携帯電話があった「デジタルネイティブ (Digital Native)」と呼ばれる世代だそうである。2週間の間、「携帯電話やメール」から離れてみると、当初は手持ち無沙汰になることもあるが、滞在中の近況や自分で考えたことを活字にして外国から郵送することで、自分を表現することの大切さや家族について考えることの一助になっている。ペンを使って直筆で書くという行為は、アナログで物事を考え、実行する重要性を再認識する機会にもなっている。参加学生の保護者からは、「子どもから初めて手紙をもらった」、「感謝の言葉が直筆で綴られていて、びっくりした」等の嬉しい報告が届いている。

帰国後は、解散式を行い各自が感想を述べる機会を設ける。結団式では不安な顔が並んでいたのが、自信を持って堂々と、「自分の言葉で」述べるようになっている。

引率教職員の役割

全ての研修には、引率の教職員が同行している。学生の心理的不安を取り除くこと、保護者に対しての責任の所在を明確にし、大学の重要行事として位置づけているからである。引率教職員の選考基準は、単に英語が話せるという観点よりも、しっかりした学生指導ができるかどうかを重視している。本学では、「教員も職員も教育者である」という位置づけを持って学生指導を行っているが、英語が話せるということだけではなく、学生が信頼感を持って接することができるかどうかということを通常の指導状況から観察を継続し、教職員の中から引率者を決定している。

以下が、役割として事前に引率教職員にオリエンテーションをしている内容である。2週間に互る海外での学生指導については、国内での学生指導のそれとは異なり、臨機応変な対応が求められる。

1. 飛行機内でのマナーを徹底させること。
2. 集合時間を徹底すること。(団体行動の統率)
3. なるべく早く学生の顔と名前・性格を把握すること。
4. 行事(授業含む)はすべて学生と行動をとることにすることを基本とする。
5. 到着後の3日間は、極力待機し緊急時に備えること。
6. 朝は集合時刻の30分～1時間程前に、集合場所に待機し、学生の声を聞くこと。(ホームステイ先、授業に関することの相談)
7. プログラムコーディネーターと連絡を密にすること。特に翌日のアクティビティーについては必ず前日に打合せを行い、学生に伝えること。(全員参加であることを徹底させる。)
8. 学生指導は毅然とした態度で行うこと。(こ

の研修は、観光ではないことを確認。勝手な行動、わがままは許されない。引率者の指示には従うことを周知させる。）

9. 現地学校・幼稚園等の訪問時には何らかの演出を行うことを学生に指導する。
10. 学生のリーダーを決定し、すべての学生に意志が伝達できるように。
11. 学生の不満（特にホームステイ先）には冷静に対処すること。ホームステイ先のトラブルは、コーディネーターとよく相談のうえ、決定。→ 最終決定は、湘北の研修旅行本部。
12. 危険を伴う活動はさせないようにすること。
13. 修了証書授与式には引率者、学生代表のスピーチ、出し物を考えさせること。
14. 貴重品、荷物の自己管理を徹底させる。ホームステイ先でも高価なものは出しっぱなしにしない。
15. 松本大学松商短期大学部との連携をとること。
16. 学生と同じ目線になるのはいいが、引率者・指導者であるという自覚のもと、毅然とした行動を心がけること。

事前学習には、引率する教職員が毎回出席して、学生との良好な人間関係を構築する。現地滞在中は、プログラムの進行状況が、グローバルコミュニケーションセンター長に逐一報告される。特に、ホームステイに関しての問題については、単独の判断をせずに、まずは現地のプログラムコーディネーターに相談する。言語的な問題があり、機微のコミュニケーションが取れずに誤解を生じている場合が多いが、この情報はコーディネーターから本学の研修旅行本部に連絡が入り、最終判断はグローバルコミュニケーションセンター長が行

う。引率者は、松本大学松商短期大学部の引率者と協働し、学生の指導にあたっている。引率者は、帰国後もニューカッスルでの経験をもとに、国内での学生指導に活かしている。また、他に実施されているUNからの教員招聘、3ヶ月留学、エクステンジプログラムなど、本学が推進している一連の国際理解教育の大きな戦力となっている。

ソニー国際理解奨学生

留学に要する費用については、航空運賃、傷害保険、授業料、ホームステイ費用などを含めると、多額の金額が発生する。本学では、グローバル社会の中で国際社会の理解やコミュニケーション能力の向上に積極的に取り組む学生の支援を目的に、設置母体であるソニー(株)による寄付金に基づき、「国際理解教育奨学金制度」を2011年から設けた。

短期海外研修への参加者には、英語の試験・参加理由書の提出・面接を行い、参加費用を軽減するための奨学金として、一人10万円を限度に付与される。面接においては海外で生活体験をしたいという熱意があるかどうかをポイントに評価を行っている。学生の参加レポートは、ソニー(株)にも報告され、教育貢献の一環とされている。

2. 国際理解教育と短期海外研修

日本ユネスコ国内委員会の『国際理解教育の手引き』(1982年)によると、「国際理解とは文化間の相互理解 [Intercultural Understanding] (異なった文化と文化との間の相互理解)だといえる。そして、他国・他民族・多文化の理解では、世界文化の多様性、価値観の多様性を受容する相互尊重と、寛容な態度及び共感的な理解ということが重要になるだろう。」加えて、自文化理解の重要性については、「他国・他民族・多文化を理解していく

課程は、常に自国の生活や文化、社会とその諸問題との対比において進み深まっていくものなのである。自国の歴史や伝統、文化そして今日の社会生活やその問題状況についての理解が正しく深いとき、それだけ他国についての理解も正しく深いものとなる⁽⁶⁾とある。

21世紀を迎え、我々はグローバル化した社会で生活しているといわれている。インターネットの急速な進歩は、瞬時に世界の情勢を知らせてくれる。ボーダーレス化した社会といわれ、グローバルスタンダードは国境を越え、以前は発展途上であった国が大きな発展を遂げていることも珍しいことではない。

我々は、国際化という海外・国内社会の構造的な大変動に対応し、主体的に生きる意識を持つには、まず言語や文化的背景を異にする人たちと偏見や異人意識を持たずに、広く交流する必要がある。

日本人は外国人に対して、日本人に対するものとは全く別の対応をしてしまう。外国人は自分達とは「異なる」のだという先入観に基づく偏見を育てていることもある。なぜそのような意識を持っている人が少なからずいるのかを考察してみると、そこには我々の歴史が大きく関与している。極東の島国である日本は、主に政治的な理由

で海外との交流を長い間途絶していた。このことは、特有の文化を生み出した反面、異なるものを排除しようとする気運を喚起してしまった。江戸時代の30年に及ぶ鎖国政策は、「同じものイコール良いこと」、「異なるものイコール悪いこと」という図式を作ったのではないだろうか。明治維新政府は、開国以降急速な勢いで、欧米文化を取り入れようと試み、古い日本の伝統スタイルの生活や文化の一部を欧米諸国化しようと試みた。僅か100年の間に、我が国は「同じもの同士」の強い団結力と勤勉さで、世界の先進国の仲間入りを果たしたのである。しかし、この基盤はほんとうに欧米諸国のそれと同一のものであったのか。「模倣の文化」を「真の文化」たるものとするには、もう少し時間を要するだろうし、未だにグローバル社会の一員としての開かれた国際的な意識や資質を持つ国民になってはいないのではないだろうかという疑問が残る。

遅ればせながら、文部省（現 文部科学省）は、1989年に学習指導要領を改訂し、「我が国の文化と伝統を尊重する態度を重視するとともに、世界の文化や歴史についての理解を深め、国際社会に生きる日本人としての資質を養う」とし、小・中・高で教科・領域にこだわらず、あらゆる学習形態でこれを実施することとした。しかしながら、異文化理解教育の内容や指針が明確に示されなかったために、多種多様な内容がそれぞれに行われ、未だにその手法が確立されているとはいえない。

今日の世界は、有史以来の大変革期を迎えていることは間違いない。教育面において我々が行わなければならないのは、グローバル社会の一員としての国際意識を育成するとともに、国際社会で生きていくためのコミュニケーション能力や多様性を受け入れることのできる資質の養成、そして異なる文化や伝統を尊重するための教育をすることではないだろうか。



〈小学校における日本文化紹介〉

長い歴史を持つ自国である日本文化と、移民によって形成されている多民族国家であるオーストラリア文化を、短期間とはいえ、相違点と共通点・ものの考え方等をホームステイという手段を使って、みだし、実際に体験することで、文化や伝統の差異を優劣視しないという考え方を涵養することは重要なことである。そのためには、大学における正規の国際理解の教育内容や常日頃から英語に触れる機会を多く設定することなどが必要になってくる。

本学には英語を専門に学ぶ学科はない。しかし、世界的企業であるソニーを設置の母体としていることから、開学以来「国際理解教育の推進」を全学的なポリシーにしてきた。内容は、短期海外研修、3ヶ月留学、気軽に英語に触れることのできるイングリッシュラウンジ、姉妹大学からの英語教員招聘、姉妹大学からの学生とのエクステンジプログラム、14回を重ねた英語スピーチコンテスト等である。学生は、在学中に知らず知らずのうちに異文化を特別視しない資質が醸成される。

特筆すべきは、様々な国際理解のためのイベントを100名ほどのメンバーで構成された、「国際交流委員会」の学生が担っていることである。メンバーは異文化に興味を持ち様々な活動を行っている。招聘教員やイングリッシュラウンジのネイティブ教員、エクステンジプログラムで来学したニューカッスル大学学生との交流を経て、外国人を特別視しない資質を育てている。教職員はファシリテーターとして、この活動に関与している。短期海外研修に参加した学生の多くはこの委員会に所属し、研修によって喚起された国際意識の涵養に努めている。

3. 対人コミュニケーションと異文化体験

人は、誕生と同時に他の人間と様々な関係を持ち、対人交流を持つことによって、社会で生きていく力を身につけていく。対人関係を維持・発展するためにはコミュニケーションを行い、維持するためには当然のことながら文化や言語の共通理解が必要になってくる。異文化体験の中で、日本人の消極的な自己表現方法はどのように映っているのだろうか。

初めて、日本人をホストファミリーとして受け入れた家庭にインタビューをしたことがある。その家族は、イタリアから移住してオーストラリア人となった人たちであった。学生に対する印象は、「おとなしい」、「イエスカノーなのかわからない」、「自分の意見を言わない」等であった。

日本人の対人コミュニケーションの特徴は、言語による理解よりも相手の心情を察知・慮ることが美德として古来尊重されてきた。相手の心情を察して、先々まで考える、遠慮をする。会話でコミュニケーションを取り、相手を納得させたり、理解をしてもらうということに重きを置いてこなかったのが、伝統的な日本文化の特徴だったのである。上記の学生の場合は、「遠慮」が理解されるはずもなく、英語力の不足とあいまって、このような感想が出てきたのであろうと推察される。

4. カルチャーショックと短期海外研修の相関関係

短期海外研修に参加する学生は、ほとんどが海外初体験である。長い間描いていた夢が実現する機会だ。しかし、2週間という短期の滞在とはいえ、異なる文化との出会いは、時としてさまざまな問題や困難を齎す。カルチャーショックと呼ばれるものである。私たちは、自文化と異なる

新しい文化に遭遇すると、違和感や居心地の悪さ、またそれに伴う心身症状を起こしたり（星野、1994；Roger & Steinfatt, 1999）、落ち込んだり、ストレスが溜まるといったようなネガティブな反応を起こす（Smith & Bond）。これらを総じてカルチャーショックという。カルチャーショックが起こるメカニズムを近藤（1981）は以下のように説明している。

人間は誰でも特定の共同体に生を受け、成長する。その場合に、その特定の社会における日々の出来事や経験の意味を理解するために必要な心理的、認知的な機構を学習し、身につけていくものである。この過程を通じて、私たちは、自分が住み、自分が取り巻く社会に所属する一員であるという意識を深め、自分のアイデンティティーを形成していくことができる。また、そのような成長過程において、自分が所属する社会に既存する価値観に影響されながら、自分の価値観、信念、社会通念などを習得していく。そして個人の社会的言動は、全てこのような価値観、信念、通念等に従ってなされるのが普通である。普段、私たちがこれらを意識することはあまりないが、自分と異なる価値観や信念を持った人と出会ったり、新しい社会環境に遭遇することにより、衝撃を受けることがある。特に新しい環境が、外国という私たちがこれまでいた環境と大きく異なる文化を持った環境である場合はなおさらのことである。⁽⁷⁾

つまり、カルチャーショックは成長する過程が様々である限り、新しい環境に接したときに誰にでも起こりうることであるといえる。

一連のつながりを4段階でとらえたモデル（Dodd, 1989; Oberg, 1960; Rogers & Steinfatt, 1999）によると、以下のようになっている。⁽⁸⁾

第一段階 Cultural Euphoria 目新しいこと

に囲まれ、驚きと興奮で幸せな気分になる。

新しい土地に着き、見るもの全てが目新しく、異文化滞在者は軽い興奮状態になる。食べ物は珍しく、人々はみな親切そうで、何もかもが素晴らしい気分になることが多い。海外に短期間旅行した経験のある人ならば、味わったことがある感覚であろう。この段階は数週間から数ヶ月続くといわれる。

第二段階 Cultural Confrontation 異文化の生活にも慣れ始め、日本と留学先の国の違いが目につき始める。この違いによりカルチャーショックを継続することもある。

楽しさは永遠に続かず、異文化滞在者の目には新しい文化の奇異な部分が多く映るようになる。買い物、移動どれ一つとっても、行動を起こすのに多大なエネルギーを必要とすることになり、うんざりしてしまう。ストレスを感じる、孤独に陥る、落ち込む、ホームシックにかかるなどの精神的に不安定な状態になるのもこの時期である。また、頭痛や披露など肉体的症状が現れることもある。

第三段階 Cultural Adaptation 日本との違いにも慣れ始め、その違いにどう対応するか等もわかり始める。留学先の国の文化にも適応し始めた状態。

この頃になると、徐々に新しい文化にも慣れ、場面場面でどのように行動したらよいかわかってくる。また、友人など人間的ネットワークもでき、文化的相違を受け入れられるようになってくる。少しずつ、その文化に自分が適応していることを実感し、そんな自分を誇らしく思えるようになることすらある。

第四段階 Cultural Fluency 人間関係も安定し、留学先の国での生活も快適だと感じる。

この時期には、異文化滞在期間も残りなくなり、そろそろ帰国を意識するようになる。慣

れてきた文化へ別れを告げることへの寂しさを感じる傍ら、帰国することへの期待も高まってくる。

人によっては、帰国後も上記の4段階を繰り返す場合がある。カルチャーショックは、当然のことながら個人的なこれまでの境遇等に起因していることもあるが、日本人の文化的な要素に左右されるところも多い。

参加学生の研修レポートに興味深い記述があった。「日本では朝食はパンだし、特に和食を好んで食べるということも無かったが、ホームステイ1週間で、日本食が恋しくてたまらなかった」。

日本では、和洋中のバラエティーに富んだ料理に囲まれ、少し歩けばいたるところにコンビニがあり食べたいものをいつでも購入できる環境で過ごしている。通常はシンプルな食生活をしているオーストラリアのホームステイの環境下でこのような心理的ストレスを感じることは、日本独特の食文化との関係があるということが考えられる。

本学が行っている短期海外研修は、前述の第一段階にあたる。パックの観光旅行でもないし個人での旅行でもない。事前に異文化に相對するための学習を行い、英語を学び、ホームステイを行うことによって、自分の目で見、生活そのものを体験することに大きな意味がある。生を受けてから18年なり19年なりの間に構築してきたアイデンティティーとの大きな違いを感じるのである。違いを感じるということ、母国である日本を考えるということに他ならない。

参加した学生の中には、他人の家に宿泊するのが初めての者さえいる。高校時代から英語は苦手であるが留学体験をしてみたいという者がいる。それが、到着した当日から異文化世界の、それも他人の家で生活するのであるから、その緊張の度合いは計り知れない。ニューカッスルにおけるホ

ストファミリーは、日本人学生を受け入れた経験のある家庭が大半で、その扱いにも慣れている。また、大学のホームステイコーディネーターが実際に家庭を訪問し、厳選している。最近問題になっているビジネスとして学生を受け入れているような家庭はない。ある国の都市では、ビジネスとしてのホストファミリーが横行しており、家族としての受け入れではなく、単なる宿貸しをしている、という新聞記事を見かけたことがあるが、ニューカッスルのホストファミリーは、日本文化に興味を持ち、若い世代にオーストラリア文化を伝えたいという、本来のホストファミリー精神を十分に理解した純粋な人達である。

参加学生の研修のハイライトは、ホームステイに他ならないため、コーディネーターは、ファミリーと参加学生のマッチングに時間をかけてくれている。各ファミリーは、学生の性格や興味に沿った対応をしてくれるのも大きな特色として挙げる事ができる。

事前学習の中で異文化適応とカルチャーショックについては、その指導方法も含め改良を加えている。前述したように、ほとんどの学生は初めての海外体験に不安を持っている。核家族化の進行による老年年齢層とのコミュニケーション不足や、携帯電話や電子メール等の発達が対人コミュニケーション能力の発達を阻害していることさえ最近の学生をみていると散見されるほどである。

研修における、未知の文化や習慣に遭遇したときの心理的ストレスとその度合いについて考察してみたい。研修終了直後のレポートによると、参加したほとんど全ての学生が、ホームステイや海外での生活に満足していることが読み取れる。

この期間(2週間)の海外研修では、カルチャーショックはどのように表れているのであろうか。当然のことながら通常の海外旅行で感じるものとは大きな差異がみられる。全てがオーガナイズさ

れたものと異なり、キャンパス内での学習以外は見知らぬ土地、見知らぬ家庭での生活をしなければならない。今まで、日本で日常生活の中で当たり前だと思っていた物事への対処の仕方が通用しない場面がたくさん出てくるのである。その思いがストレスとなって多少なりとも表れてくることは当然考えられる。しかしながら、日本とは異なる気候、広大な大地、食事、オーストラリアの人々の、「人生をいきいきと生きる」というライフスタイルは、大多数の参加学生にとって非常に新鮮・快適に感じられることが多いので、ショックを感じる度合いは少ない。参加した学生はつかの間ではあるが、海外から日本のことや家族の触れ合いの重要性・環境等を考える機会を持つのである。

帰国した後も、第一段階のEuphoriaの時期は継続する。「2週間の研修は、あっという間に過ぎてしまった」、「家族を大切に、自然を愛するオーストラリア人のライフスタイルは、人生を楽しんでいるようにみえた」、「英語力が十分ではなくとも、一生懸命伝えようと努力をすると、ファミリーはそれを理解してくれた。もっと英語ができるようになりたいと強く思った」等、感想は非常にポジティブなものが多い。

移民によって構成されているオーストラリア社会は、異なる言語や文化・習慣を持つ人を、異端視しないで受け入れることのできる寛容さを持っている。ホームステイを経験した学生はその寛容さの一端を垣間見て、自己の心に残すのである。自分の意見をはっきり言わなければならないことや、人に挨拶をするのが当然のことであること等を学び、帰国して自分自身に問いかけ、実践している者も多い。

「たかがの2週間」の滞在は、何千キロも離れた土地に、自分が（を）知っている人がいるということに誇りを持つという、「されどの2週間」とし

て、重要な期間となっている。その後も、第二の家族として連絡を取り合ったり、再度訪問する等、交流の輪は継続している。

まとめ

短期海外研修をはじめ本学が行っている一連の国際理解教育に参加することによって、学生達は異なる言語や文化的背景を持った人を、「同じ地球人」としてみることができるようになる。あるいはそのきっかけになっているということが言える。単一民族である日本社会で育った学生が、移民によって構成されているオーストラリア社会で、日本の基準とは異なる現実とこれまでの常識を覆すような事実と直面し、衝撃を受け、考える大切さを学んでいる。

2週間もの間、ホームステイをしながら異文化を体験することは、ほとんどの学生にとって最後の機会になるかもしれない。この感受性の豊かな時期に、日本を外から見ることによって、自分の将来や家族、そして母国である日本を考える時間を持つことは非常に大切なことである。文化や背景が異なる現地の人々の生活に触れ、日本では当たり前前に享受されている、モノや環境等の重要性を再認識することができる。この意義は大きい。また、思っていることを「英語で」相手に伝えようと、懸命に努力する。これがコミュニケーション能力を向上させるためには、もっとも重要なことである。

短期海外研修に参加したことによって、その後のライフスタイルを変えた学生も多数いる。ホストファミリーに英語が伝わらなかったもどかしさで、本学のイングリッシュラウンジを頻繁に利用するようになった。卒業後に長期の留学をした。国際交流委員会に所属して、活動を活発に行った。英語関係科目を積極的に履修するようになった。

日本文化についての質問をされて、答えられなかったことから、新聞を毎日読むようになった等。異文化を体験することは、自分自身や日本を考えることに他ならないのである。

2週間という期間は長くはない。しかし、海外での濃密な時間を過ごした学生のその後の活動や言動の変化はめざましい。「短期海外研修への参加は、かけがえのない経験になっている」と参加した全ての学生が述べている。現地で「生活することによって多様な人と出会い、そこに生きる人のエネルギーや考え方を目の当たりにしながら、外国や母国である日本、家族等を考える学びの効果は、非常に大きい。同時にそれは、自分自身を見つめなおす大きなきっかけになっている。異文化世界で暮らしている人々とのコミュニケーションを通して、対人コミュニケーションに関する知識を獲得するためのモチベーションを得ているのである。

21世紀は、産業革命以来の大変革の時代であるといわれる。特に、インターネットをはじめとする情報通信の飛躍的な進歩は、世界を大きく一変させた。最新のテクノロジーにより、私たちは瞬時に世界の出来事を知ることができるし、映像テクノロジーを利用したインターネットを介した「You Tube」等の普及は、身近な出来事を「一般の人」が撮影し、それを「一般の人」が気軽に見ることができるようになってきている。しかし、情報や映像は、自分が実際に現地に行って確認したもので体験したりしたものではないということを感じなければならぬ。ものごとの本質を知るためには、実際の場면을体験することによって得た、心の動きを大切にしなければならない。

短期大学という、社会に出る前の「教育ラストステージ」で学んだ事柄を、来るべき「社会というセカンドステージ」以降につなげていってくださることを望んで止まない。また、世界が標準化さ

れていくという現実の中で、日本人としてのアイデンティティを維持しつつ、独自の文化を継承することや、言語の大切さを育成するための教育を継続していきたいと思っている。

姉妹大学関係者との良好な人間関係と、内容を積み上げてきた事前学習の実施、引率システム等により、本学の短期海外研修は事故も無く、過去に780名もの学生が参加してきた。卒業生を含む夫々が、その素晴らしい経験を胸に、社会で活躍している。

グローバル化（globalization）が進行する近年の状況下、真の国際化とは、異なる文化や習慣を持っている人や国に対して偏見を持つことなく付き合うことのできる人を育成することであり、そのことに少しなりとも貢献できていることに喜びを感じている。

こうした草の根の交流がやがて芽を出し、参加者一人ひとりの将来に大きな花を咲かせ、実を結ぶことを期待しつつ。

【註】

(1) 相互点検・評価

本学は、松本大学松商短期大学部と2011年に調印後、「教育内容」、「学生・教職員交流」、「就職支援」、「学生募集・企画広報」、「HP・図書館」、「ITを活用した教育交流」等を掲げ、これまでに計6冊の報告書を作成し、両大学の教育活動に活かされてきた。学生・教職員の相互交流活動への発展をみて、双方の主要行事への学生参加や豪州短期海外研修の合同実施において、効果を挙げている。

(2) グローバルコミュニケーションセンター

湘北短期大学の学科横断の学内組織。国際社会で生きるための知識・コミュニケーション能力・行動力を兼ね備えた人材の育成を目指している。英語・中国語をはじめとした外国語教育、CALL演習室（Computer Assisted Language

Learning) を利用した先進英語教育、海外姉妹大学との語学研修や国際遠隔教育、交換留学生の受け入れ交流、英語スピーチコンテストやイングリッシュラウンジ等を中心に、年間を通じて学生主体のプログラムを推進している。

(3) TESOL

TESOL とは Teaching English to Speakers of Other Languages のことであり、世界レベルで承認されている英語教授法資格のことを指す。

(4) エクスチェンジプログラム

本学が、海外姉妹大学である、オーストラリア国立ニューカッスル大学の学生を受け入れて、学生間の交流を行っているもの。1992年から開始され、毎年実施している。このプログラムは、オーストラリア学生の日本理解プログラムとして大学当局からの評価も高く、奨学金プログラムとして例年多くの学生が出願している。本学の国際交流委員会の学生が中心となり、プログラムを企画・実行している。

(5) イングリッシュラウンジ

前期・後期それぞれ月曜日から金曜日の午後、アメリカ、スリランカ、オーストラリア、カナダ等出身のネイティブ教員が、本学のイベントホールに駐留し、学生が気軽に英会話を楽しむことのできるラウンジを設置している。年間の利用者は、延べ2,500人を越える。このことにより、学生は日常的に英語や異文化に触れる機会を持つことができる。

(6) 吉田暁監修『異文化コミュニケーション』253頁、有斐閣、1991年に引用されている。

(7) 西田ひろ子編『異文化間コミュニケーション入門』122頁、創元社、2000年。

(8) 西田編、122-123頁。

On the Educational Significance of Study Tours Abroad

KUROSAKI Mayumi

[abstract]

It is a policy of Shohoku College to promote the students' international understanding. To achieve this end, a wide variety of programs have been carried out since the college's foundation. This paper attempts to examine the educational effectiveness of the study tours and the correlation between tours and culture shock of the participants.

[key words]

study tour abroad, international understanding, culture shock, motivation promotion